ひゅーるぽんNews Letter
うるとらのほし
2019.11
173

〒731-0102 広島市安佐南区川内6-28-15
認定NPO法人
コミュニティリーダーひゅーるぽん
Phone.082-831-6888/Fax.082-831-6889
www.hullpong.jp

今月のとぴっくす

2019.11.01.Fri

会報「うるとらのほし」再始動!!

１９８１年の夏、私たちは「活動」を開始しました。その年は、誰もが当たり前に地域で暮らすことをめざす国際障害者年でもあり、同時に、全ての障がいのある子どもたちが学校に通うことができるようになった「養護学校の義務化」という制度が始まった2年後の年でもありました。「学校が始まっても、夏休みに行き場がない障がいのある子どもたちのために、夏休みだけの特別の学校を作ろう」と子どもたちのお母さん方が立ち上がり、安佐南区社会福祉協議会がそれを応援しそこにボランティアが集まり「夏休み教室」という地域の集いの場が立ち上がりました。私たちは、その活動に参加したボランティアで、それが私たちの始まりでした。

その夏以来、私たちは、社会福祉協議会さん、民生委員さん、そのほか地域のみなさんとともに障がいのある子どもを支援するボランティアグループとして歩んできました。しかし、90年代に入り、私たちのグループにも変化が訪れました。学校に行くことが難しい、いわゆる「不登校」と言われる子どもたちが、病院のドクターや保護者のすすめでボランティアに参加するようになりました。その一方で、私たちが関わる子どもたちの中には、学校でのいじめなどが理由で不登校になってしまう子どももいました。90年代は、神戸の事件の発生などから、「子どもが危ない」といわれた時代でもありました。子どもたちと常に接している私たちからすると、一方で「オウム真理教事件」「バブルの崩壊」など大人の作る社会全体こそ危なっかしいのではないかと思うことがしばしばありました。当時、特別支援教育の教鞭を執っていた私は、そうした子どもたちに対して有効な対応ができないまま疲弊していくさまを感じました。１９９５年に発生した阪神淡路大震災にボランティアが多く参加したこともあり、こうした子どもたちを変えていくには子どもたちにボランティア活動をさせることだという風潮が高まったのもこの時期からです。

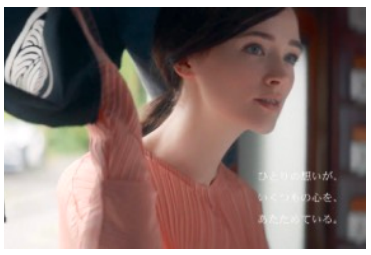
私たちは、そうした社会を見つめながら学校でも家庭でもないもう一つの「育ちの場」を作ることが大切だと思うようになりました。不登校や障がいのある子たちが、楽しく生き生きと成長していける場を作りたい…と、わたしたちは、ついに２００１年、ボランティアグループからＮＰＯ法人へと組織を変え、安佐南区川内に子どもたちが育つ拠点を構えました。今でこそ、フリースクールや放課後等デイサービスといった場所が多くありますが、当時は、そうした考え方自体がほとんど社会になかったため、本当に運営には苦労しました。家賃と水道光熱費の支払いで精一杯で、2年間スタッフの給料はほとんどない状態でした。しかし、そうした私たちを支えてくださったのは、それまでの活動で知り合った多くの方々でした。無一文だった私たちに、拠点設立時はもちろん、それからもご寄付や活動の応援など多くのご支援をしてくださいました。そして、２００３年。福祉制度の変化とともに、私たちのこの活動が広島市より公的なサービスと認められることとなります。

さらに、２０１２年ごろから、私たちは児童福祉施設である「児童発達支援センター」設立に向けて動きました。この動きが私たちをまた大きく成長させてくれたのです。

（次号につづく）

時代の流れとともに情報のスピードが重視されたことに伴って、２００２年１７２号の発行を最後に休止していた私たちひゅーるぽんの会報「うるとらのほし」。このたび、その会報が復活することになりました。私たちの活動やそこに込める想いが多くの人に届けばと思います。復活第1号、通算１７３号となる今号では、私たちの団体についてお伝えします。

Message…



見　え　な　い　力

昭和生まれの私にとって，２つ前の年号の「明治」と聞くとかなり昔だなぁというイメージを持っていましたが，なんと，その私自身もこの5月に「令和」の時代を迎え，ついに年号２世代前生まれ人となってしまいました。ここでふと，時代を俯瞰してみると，昭和の終わりとなった1989年以降，特に，2000年以降は，ずいぶん世の中全体のスピードが速くなってきたように思います。平成に入ったばかりの頃には，「昭和」を懐古する映画や「スローライフ」という言葉も流行ったりしたのですが，今は，それすらも過去の話になったようで，確実に時代の変化を感じます。

そしてもう一つ，平成の時代に変わってきたのは「見える化」という言葉に代表されるように「可視化」「具体化」の重視ということだと思います。なるべく具体的にわかりやすくという考え方は，やがて，誰が見てもわかるルールに従って物事を進めていくという厳格化，規格化を求めることへとつながっていきます。すると「例外」や「あそび（どっちつかずの領域）」はなくなり，不都合は一切排除していくようになります。万が一，不都合や不安な要素がみつかれば，それは悪として，一気に解決のルールを作り，対策をする。私たちの福祉現場では，業務ガイドライン遵守に加え，そのための研修，点検，報告，記録に追われる…というのが日常となっています。今日，それは当たり前のことなのかもしれませんが，そういう社会になればなるほど，何となくギクシャクした堅苦しさ，重苦しさを感じるのは私だけでしょうか？そうした雰囲気は，人間同士の信頼感さえも遠ざけてしまうようです。そういえば，自らを公明正大に証明する名札をつけて仕事をすることも，もう当たり前になってしまいました。

さて，数年前，外国人の女性が生け花や短歌，水引などの日本の文化に触れながら

「人生は言葉で伝えない想いの方が，はるかに多い。」

「会えない時間は会っている時間より，人を思っている。」

「人の想いは，見えるものではなく気づくものでした。」

というセリフを語る「日本のひとときと」というJTのCMがありました。映像も構成もキャッチもとても素敵で私の心に響きました。そして，このCMは私たち人間にとって人に想いを馳せること，人を想うことがどれほど大切で，たくさんの幸せを生み出す可能性を秘めているかということを私たちにじっくりと思い起こさせてくれるのです。私たちがめまぐるしいスピードの中で，今失いつつあることはきっとこういうことなのだと私は感じます。

ひゅーるには，話すことが難しい子もいますが，その子たちを見ていると，その子たちなりに，人に自身の思いを向け，かかわり，主張し，わかりあいながら成長している姿を感じます。昨日は喧嘩していたのに，今日はキャッキャ言いながら友達と遊んでいる姿を見ると私はうれしくなります。発達の特性についていくら勉強して理解することよりも，ともに，関わり合う時間を作ることの方がどれだけ大切かということを子どもたちは身を持って教えてくれています。子育ては大変なことは多いですが，子どもの思いに目を向け続けることのできるお母さんはすごいなと思います。もちろん，そこには，根気も努力も，そして時には涙もありますが，かかわりを重ねれば重ねるほど，相互の心は確かに成長し，より一層の幸せ感に満たされることに気づきます。さらにそのプロセスが，その関係を軸にした人の輪，理解をし励まし応援してくれる人の輪を創り出してもくれるのです。

これまで，世界の教育者はこぞってテストの得点や通知表のように目に見える力，つまり認知能力を高めることに熱を上げてきました。しかし，数年前から，そうした「知識」や「スキル」よりも目には見えない「人間性」（非認知能力）を高めることが大切だという考え方に変わってきました。さらにこの力を高めることこそが適切な「認知力」を高めることにつながるということもわかってきました。日本でも昨年よりこの考え方が学習指導要領の中心に示されています。

令和の時代，私たちは，今一度足を止めて，隣人に目を向け，関わり合うことを大切にしていきながら，見えないもの感じ，見えない力を成熟させていかなければならないようです。それは，きっと私たちの未来を本当に幸せにしていく力になるのだと思います。

川口隆司

特集

子どもたちの食に寄り添う ～ ひゅーるぽん の給食先生として ～

今回は給食を通して垣間見える子どもたちの姿や思いをお伝えします。

管理栄養士　伊藤　綾香

私は、児童発達支援センターひゅーるぽん「ひよこ組」で給食業務をしている管理栄養士の伊藤綾香です。ここでは、私がひゅーるぽんで働くことを決めてから現在に至るまでの、管理栄養士としての葛藤や悩み、そこから私なりに感じたことを書きたいと思います。

大学4年の秋、私はすでに実家のある地元の企業で働くことが決まっていました。そんなある日、クラスのホームルームの時間にスクリーンに映し出された求人情報のひとつが目に飛び込んできました。「ひゅーるぽん」という面白い名前が気になり、求人情報に目を向けました。そこには仕事内容として「障がいのある子どもたちの給食作りと保護者に向けた食育」と書かれてありました。私はそれまで障がいのある子に関わった経験もなければ、関心があったわけでもありませんが、興味を持ち、自分にできることがあるかもと思い、すぐに見学のお願いをしました。

ひゅーるぽんは、建物が新しくとても清潔感があり、周囲には自然もあってあたたかい印象を受けました。スタッフの人もみんな笑顔で迎えてくれ、そのたった一回の見学で私はここで働きたい、と強く思い、その場で採用試験を受けたい意思を伝えました。それから、私は必死に勉強しました。栄養士ではなく管理栄養士としてひゅーるぽんで働きたかったからです。管理栄養士の国家試験合格に向けて、毎日、大学のゼミ室に一番最初に行き一番最後に帰る生活を繰り返す毎日でしたが、その時間は苦ではありませんでした。なぜならひゅーるぽんで働くことをイメージをするとワクワクしたからです。

その後、試験に無事合格しひゅーるぽんで働くことになりました。しかし、ここから葛藤の毎日が始まったのです。私は、考えが甘かったのです。子どものごはん作りなら、やればなるようになる、と、どこかで思っていたのだと思います。しかし、自分の作った食事を子どもたちが食べるということの責任の重さに襲われました。衛生管理などは大学で勉強し基本的知識は身につけていましたが、実際の現場となるとまた違ってきます。大丈夫だろうではなく、絶対に大丈夫という確信を持って食を提供しなくてはならないのです。食材の大きさや、硬さ、味付けの濃さなど本当に私が作っているものは子ども達にとって良いものなのか、作っている時も自問自答を繰り返しました。本屋へ何度も行き、役に立ちそうな本を片っ端から読んでみたりしましたが、どれもありきたりなことばかりで参考になりませんでした。そんな時、理事長に紹介してもらい西部こども療育センターの管理栄養士の先生の元へ研修に行く機会をいただきました。恥を承知で基本的なことから教えていただき、子ども達への関わり方や考え方を学びました。そこから私の考え方は少しずつ変わっていきました。本に正解は書いてない。答えを知っているのは子ども達自身なんだと。子ども達、一人ひとりの様子をしっかり観察して、食材提供の形態を変えていきました。しかし、自分の作っているものに自信がなくなり、給食を食べている子どもたちの様子を見に行くのが怖くなり、子どもたちから逃げてしまっていた時期もありました。けれど、気づけばいつも子ども達のことを考えている自分がいました。友人とご飯を食べに行っても、お酒のおつまみでさえも子ども達に出すなら、と考えることもあります。また、出来上がったものを見て、もっとこうすればよかった、この食材は違うものにするべきだった、といつも反省を繰り返しています。でも、逆に子ども達にはかえってその反省点こそが好評なこともあります。私は、なかなか自分の作ったものに満足できないのですが、実際の評価は子どもたち自身が教えてくれます。子ども達の無邪気な笑顔や、素直な表情を見ていると今度はどんな料理を食べてもらおうかとワクワクしながら給食づくりをしています。

本当に子どもたちは予測不可能で面白いです。世の中にはいろんな食べ物があって、子どもたちにとっては初めて見るものは怖くて不安かもしれません。しかし「一口食べてみると美味しいかもよ？すぐ決めつけず、何にでも挑戦してみようよ。」と伝えたいです。実際、初めて出す料理に戸惑う子は多いですが、口にできると「おいしい」「なにこれー？」「やわらかい」「○○なあじがするよー！」といろんな感想を言ってくれます。そして、一度その体験をすると、次にまた初めての料理が出ても「食べたことないけど、食べてみるー。」と自分から食べられるようになり、子どもの世界が少しずつ広がっていくのを感じます。そういう声を聞くたびに、また新しい食材や調理法を探したくなります。

最後に、私が、伝えたいことは、大人が決めつけないでほしいということです。「この子は、これを食べないから出さない。」「きっとこれも食べないだろう。」と言う考えが子どもたちの食事の幅を勝手に狭めているかもしれません。子どもたちは、私たちの想像を超えてきます。その時ほど嬉しい時はありません。食べることを一緒に楽しんでほしいです。食べるという行為は、栄養を摂って身体を大きくするという役割だけではありません。交流のひとつとして、休憩のひとつとして、頑張る力を育てる教材のひとつとして、たくさんの役割を持っています。特に障がいのある子は1度こだわりを持ってしまうとなかなか崩すことが難しいように感じます。最初は嫌がり、手をつけようとしないかもしれないけれど、色々なアプローチで幅広く挑戦していくことをオススメします。味付けや食材の切り方など工夫できることを一緒に考えていきましょう。

将来、子どもたちが大きくなり自分で食べるものを選ぶようになった時を想像してください。いつも買うものが決まっていて同じものを食べているより、自由に自分で考えて選べるようになっているほうが、人生豊かで素敵だと思いませんか？

給食は食べなければならないものではなく、給食の時間を楽しみにし、友だちと楽しく交流し、苦手なものがあっても挑戦してやるぞと思って食べてくれたらうれしいです。

これからも、子ども達の笑顔と驚いた顔など、色々な姿を見られるように安心安全でおいしい給食づくりをしていきます。まだまだ未熟な私ではありますがこれからもよろしくお願いします。

お知らせ

ひゅーるぽん主な行事

11/16 ひ/き ぴよきっず遠足①
　　公 地域食堂
11/30 ひ/き ぴよきっず遠足②
11/30 HPAR2020写真撮影
12/7.8 おきらく劇場ピロシマ
　　松山公演
12/17 ひ お楽しみ会
12/21 公 お餅つき大会
12/24 サンタプロジェクト
12/27 Ⅱ期終了日
12/29~1/4 お休み

ひ　ひよこ
き　きっず
ぽ　ぽんぽん
保　保護者
公　公開行事

主な行事のミニ解説

ぴよきっず：ひゅーるぽんに通う２歳～18歳のこどもたちの異年齢グループでの交流活動。今回は遠足にでかけます。

おきらく劇場ピロシマ：障がいの有無に関わらず、こどもから大人までみんなで創る演劇集団です。2017年から発足し今回は初の県外公演です。

サンタプロジェクト：クリスマスイブの日にボランティアがサンタに扮してこどもたちの家にプレゼントを届けます。ひゅーるぽんのボランティアグループ時代から続く恒例行事です。

●「みんなおいでや」地域食堂

11/16(土)11:30~14:00

「地域が集う幸せ」をテーマに、ひゅーるの新しい試みとして地域食堂が始まります。子どもを始め、地域の方なら誰でもいらっしゃることができます。ぜひぜひ、「みんなおいでや–」

メニュー：カレー
（アレルギー食には非対応です）
料　金：子ども200円、大人400円
※限定60食です。
12月は、21日の「お餅つき大会」が地域食堂になる予定です。こちらもぜひおいでください。

●広島市ピースアートプログラム アート・ルネッサンス2020 写真撮影協力ボランティア募集

11/30日（土）9:00~17:00

場所：日通倉庫(西区)
障がいのある人の自由な表現を応援するアート展HPAR。今回は図録製作にむけて入選作品の写真撮影をします。お手伝いは軽作業です。部分参加でも可能です。昼食もご用意します。

●子育てサロンひゅーる

毎月第２，第4火曜日 10:30~11:30

未就園の親子を対象にした子育てサロンです。
事前に連絡をいただければどなたでも参加することができます。

●ボランティア募集

ひゅーるぽんでは随時、学生ボランティアさんを募集しています(^o^)/

「子どもたちと遊んでみたい。」「一緒にアートをしてみたいなぁ。」など興味を持った方はぜひご連絡ください♪
初めてボランティアに参加される方も、どんな活動ができるのか、参加時間など事前にオリエンテーションをするので安心して参加してください。ご連絡していただいた時に、日時を相談して決めましょう。
皆さんからの連絡をお待ちしています!!

Hull Fanへのご協力 ありがとうございます

2019年度4月～9月まで

迫谷克利　清水拓郎　松野裕　友重未来
佐野和輝　橋本太　山本和也　岡本哲司
田邊尚世　小川勝則　園山司　中谷定子
志茂洋二　田鍋俊之　原紀彰　橋本裕人
谷博利　阿曽沼武　秋田訓宏　宮本優作
井上大輔　野津英聖　天道仁　三登陽子
北田至幸　金子涼一　湯浅真弓　原田憲
門田知之　古川勝利　胡明憲二　柴田純
西村いづみ　渡部早栄香　多久見宗一郎
湯地由美　田中建二　猪飼亮　大江香織
崇徳学園インターアクトクラブ　超円寺
藤井恭子　松田啓太　田邊尚世　西谷辰子
久保木晴一　下垣内治登　藤井恭子
松田啓太　田邊尚世　（敬称略）
その他 スタッフ18名　匿名希望20名

ご寄付

相川真司　桂大介　田中辰也　坂本美恵
Nakagaki　Tomoharu　江浜遊亀子
今福三津枝　藤原照夫　多久見宗一郎
鎌田春生　湯地由美　西谷辰子　三登陽子
田邊尚世　(株)エクシス
己斐地区民生委員児童委員協議会
(特非)ひろしまNPOセンター
（敬称略）

※物品の寄付もたくさんいただいております

今年度累計

88名（91口）

ありがとうございます

私たちの活動は
あなたのおこころざしで
もっとあったかくやさしく
ふくらみます
賛助会員 Hull Fan
年間4,000円
お申込みは
www.hullpong.jpから

このご寄付は税制上の優遇を受けることができます

この子らと世に光を…輝くこと，伝えること，創ること
発行者：認定NPO法人ひゅーるぽん　広報委員会
発行日：2019/11/01（年２回発行）
ひゅーるぽん会報”うるとらのほし”